

世界

鼓動

田中 均

ハーバードで語ったこと

り、就職してしまう。それに比べて、中国人の学生は学位の取得に一生懸命だ。多分、日本ではハーバードといえども外国の学位はキャリア上さほど価値がないと思われるのだから。それが留学生の減っている一つの理由でもある。

今回の訪問で、エズラ・ポグレル教授が日本人留学生のために主宰している「ポグレル塾」にも参加した。私はあえて、「皆さんは、日本人であることを忘れてほしい。ハーバードで勉強をしている最大の意味は、競争に身をさらし、世界に通用する普遍性をもった知的指導者になることだと思う」と申し上げた。日本の社会だけを念



画・onyx

あるべきアジアとの関係

頭に行動する時代ではない。世界で生きるためには、ハーバードの学位も有用である。

ハーバードでの講演と、その後のハワイでの北東アジア協力対話(日、米、中、韓、露の政府関係者ならびに有識者が会合)では、今後の米国の東アジアへの姿勢について、二つ注文をつけた。

まず、米国は中国を「戦略的競争者」、「責任ある利害関係者」あるいは米国と共に世界を論ずる「G2」などと形容してきたが、

自国との対比で他国を一方的に断じるのはやめた方がよいのではないか。中国も米国も、もちろん日

質化(エンリッチメント)に米国も参画し、地域全般の環境を良くするという概念のなかで中国についても語るべきではないか。

そして、第二に、米国はイラク戦争の教訓を十分踏まえて、東アジアへの関与を考えてもらいたい。イラク戦争では、地域のパートナーなしに外から国を作り変え

ようとして成功せず、多大の負担を米国に強いた。今後、東アジアでは中国の経済力・軍事力がますます拡大する。米国は日本や韓国、豪州など同盟国及び東南アジア諸国と地域でのパートナーシップを強化していくべきだろう。

米国の単独行動主義(ユニラテラリズム)は言い古されているし、オバマ大統領の下で米国は多国間主義に傾斜してきたとされる。財政赤字に苦しむ米国が、今後単独で軍事行動をとることも考えにくい。ただ、世界の指導者としての責任を果たすため、最後は行動すべきとの認識は引き続き強い。このような米国と日本は、今まで以上に強いパートナーシップを築いていかねばならない。

ただ、日米関係の重視と米国への追従は同義ではない。普天間問題や環太平洋パートナーシップ協定(TPP)にしても、常に受身で考えるのではなく、主体性をもって未来志向的に考えていくべきである。次期戦闘機についても、現在米・欧の航空機が候補となっているが、厳密に技術的メリットに基づいて主体的選定が行われることが重要だ。客観的な性能に基づく選定をゆがめたこととられれば、かえって日米関係を損ねかねない点に留意すべきだと思う。(たなか・ひとし日本総研国際戦略研究所理事長)